

泌 尿 器 科 紀 要

第 8 卷 第 6 号

昭和 37 年 6 月

随 想

むべ（郁子）とあけび（通草）とポーポーと

東京都 広 瀬 常 雄

わが庭に古くより郁子（むべ）の棚ありて夏は西日をさえぎる。これに因みて庵号を郁子軒ともいい、又やまと風にむべの屋とも名づける。家は小妻が関東大震災の後に建て、このたびの戦災で焼かれている筈なのを空襲のある間火伏（ひぶせ）の日蓮上人聖像の画幅を床に懸けつ放しにして置き留守を頼んだ人にお水を忘れずに供えさしておいたその御功德でやつと厄を脱がれたといういわくつきである。永年住みなれた神戸と西宮と2軒の家を終戦間際に相次いで戦災により焼失、無一物となりそのままでは身を寄するにも事欠く始末なので終戦の布告を待ちかねて上京一先づここに落付いた。従つてほんの僅かの時間だつたが御病床に故太田教授をも御見舞することが出来たし、同夜高橋明大人を訪ねて意外の御歓待を受けたことは終生の忘れ得ぬ想出となつた。

一夏アイオン台風が吹きまくり、無惨にもこの郁子の棚の崩壊を見たので修理に際しては柱を増強し、郁子の外に垣根のそこらに自生する通草（あけび）4—5株を栽え添えたところ、年を経るに従い後者の成長率遙かに早く棚の大半は通草の占むところとなり柱に巻付いた蔓の太さも郁子を凌ぐに至つた。

一体、日除けの棚には紫の花房長く短かくゆらぐ藤を好んで植えるものだが、私の経験では金ブンがたかりやすい欠点がある。そこで庭好きの通人連は葛の大きい蔓をからます。これは花も上品だし秋風の吹きそめて白白と葉を裏返す様はまたなくうれしいものである。私は目黒の自然植物園の事務所の軒先にこれを眺めた。

もし凝り方が葛の蔓と迄は行かぬ時には普通郁子を栽える。これの古木は小石川の植木園や千葉県松戸市の園芸大学構内などにあり後者の垣根をなすものは相当立派である。

実用的といえは郁子の代りに通草をもつてしても日覆には充分役立つことは上述の通り私には経験済みであり、廉価なのと、どこでも手に入れやすく、且つ早く成育繁茂する点などから大衆的には通草棚を推奨したい。ただ庭師がどうしてこれを好まないのか私はその理由を解するに苦しむ。郁子は上品で通草はなんとなく下品だとでもいうのかもしれない。

この辺で両者の異同に就て記して置きたい。元来郁子と通草との両者は共に同じく木通（あけび科）の蔓性灌木であるが、その間には次の如き2—3の差違を認められる。

わが畏敬する木下空太郎兄の随筆を読むとどんな小さな草木のことを記す時でも必ずといつてよい程そのラテン語の植物学名を挙げるを習わしとした。そのひそみにならつて私もまづそれを列べることにする。即ち、

むべ, *Stauntonia hexaphylla*, Decne

あけび, *Akebia quinata*, Decne

みつばあけび, *Akebia lobata*, Decne

であり、最も大きな両者の違いは郁子は常緑樹で、一名ときはあけびとも呼ばれる株があるゆえんだが、それと異り通草は落葉樹なることである。

そのほかの区別は花に於て認められる。その開花期は両者共大体4月で、木により又土地の寒暖の差で一月位の遅速がある。現在（4月末）の私の庭頭では郁子はまだ花を着けず、通草がその新葉と共に咲き揃つておるが、近くの家では郁子の花が今真盛りである。ただし植物学の書物では大抵郁子が3—4月、通草は4—5月とし、郁子の方がやや早く咲くことになっている。

通草の花は同一の花軸に紫紅色の各3弁づつの円味を持つたやや大き目の少数の雌花と、小さい多数の雄花とをつけるのが特徴であるが、郁子の方は初め白色で後にはそれがやや淡紅色を帯びる。しかもその花蓋は6裂で細く尖り殊にその中の3弁は羊角の如く尖鋭であり通草とはその花の形が全貌的に異なる。

葉は両者共大抵5葉で小児の手掌をひろげた形を示し、郁子の葉数の7, 5, 3はめでたいものとされる。通草の3葉にはみつばあけびと特称されるものがある程で主にバスケットなどの蔓細工に用いられる。勿論その葉数は必ずしも奇数のみとは限らず時に4枚とか6枚とかの偶数のも見られるのである。

近来東北、北陸方面で流行している山菜料理には郁子や通草の新芽や幼茎を味わしめる。又昔から山住みの人は乾燥してほうじ茶に煎じたりもする。京都の鞍馬山の名物木芽漬はこれを材料にしたものである。

次に果実のことに及ぶがこれは小供の時に山野に遊んだものならばその木や花のことは知らずともその甘味によつてよく覚えていることで紅紫に美しく色づき熟れて縦に裂けた切れ目からとろりとした白い果肉がのぞいているのを口に甘い汁を吸い舌の上に残る黒い粒々の種子をはきすてた記憶をよみ返えらすことが出来るであろう

両者共に味、香気、色、大きさ等は大差なく、どちらかといえば郁子の実は小ぶりで楕円に近く、通草の方はやや大きくて瓜形をなす 丈は大略2寸余モンキーバナナ位にはなる。肥料を充分に与えて賞味用に栽培しているのを私は溪谷長瀬の料亭の裏畑で見た覚えがある。

ポーポーはパーポーともいい又ボポーともいい **Papaw** と書く 元来北米の原産蕃荔枝科の灌木で果実の感じは前の2者に似ているが蔓を持たぬし相当高くなるし葉は長い円い大きな葉で秋の黄落は他の木々にさきがける等全く別箇の植木である。近事これの花を活ける者、果実を賞味する人々漸くその数を増し銀座の千疋屋の店頭にも見られ、岡山倉敷の鯛惣の商品パンフレットにも白桃と並んでその名を列ねているようになった。開花結実は郁子通草とほぼ同期で花は各3弁づつの黒味がかつた紫の萼と大小扁平形の外と内側との紫紅色の花弁群とで3重に包まれ中心に青い橘実を思わす蕊頭が見える風鈴形の一風変つたもので、秋の熟果は蕃瓜樹（パパイア）と同様の黄色クリーム状の果肉に満ち中に扁平な柿の種を3つ合わせた位の黒い核を蔵している。ポーポーを私が初めて口にしたのは新潟の故橋本喬君の宅であり、種子を持帰り、宅の郁子の種子を代りに送つたもので、その時植えたものがやつと10余年たつて今花を開いて来た。毎年いつ咲くものやらと待ちに待つた甲斐あつて初めてそれを見た喜びは相当に感銘深きものがあつた。こちらから送つた郁子は既に新潟によく育っているのを見届けているから両方ともその目的を達したのだが悲しいかな友は既に此世にないのである。

それにしても開花を初めて認めたこのポーポーがうまく今年の秋に成熟してくれて故人の霊前にあのクリーム様の果肉を供えて共に賞味し得るや否や初めて花をつけた年には実らぬともきくが来る秋を楽しみつつ待つこととせう。やがて同君の3回忌がやつて来る。

ポーポーの花見上げけりとの曇り 社前